

一、染料・化粧料編

染めものとお化粧の原点をさぐる



(近岡氏筆)

くれないの花にしあらば衣手に

染着けもちて行くべく思ほゆ

(万葉集)

紅にそめし心をのたまわず

人をあくにはうるてふなり

(万葉集)

外のみに見つつ恋せむ紅の

未摘花の色に出ずとも

(万葉集)

一、染色材料としてのベニバナ

1 ベニバナの色素

植物から染料をとるのに、赤い色はアカネ、スオウとベニバナであった。紫色はシコン、はなだ縹は濃いものも淡いものもアイ、茶色はクワ、クヌギ、カバなど、黄色はキツルバミ、カリヤス、ヤマブキ、ウコン、キハダ、クチナシなどであった。

これらは大部分は山野に自生しているものばかりである。ところがこのなかに、人間が種たねを播いて育てなければ採れないものがある。ベニバナとアイである。この二つは栽培作物なのである。だからベニバナとアイには農耕栽培文化の歴史がある。もしおよそ紀元前三〇〇〇年のエジプトで、ミイラを包む亜麻布を染めた赤がベニバナであるといわれているのが本当とすれば、古代エジプトでは、かつて緑地であったサハラが砂漠化し狩猟採集の文化につづいてすぐ農耕栽培文化がはじまっていたことになる。

これは真壁 仁著『紅と藍』平凡社カラー新書（一九七九）の中の「紅の道」（24）の冒頭を飾る文章の引用である。ここで指摘されているように、ベニバナはわが国に渡来の時から染料を採るための工芸作物として取り扱われ、アカネやスオウよりは計画的に、そして効率的に染

料の生産が行われていたのである。

さて、ベニバナが赤色の染色原料（染料）たり得る根拠は、花べん及び花筒部の組織細胞内に生成される赤色色素（カルサミン）によるもので、この色素は開花時よりも、しばらく経過して発現するもので、開花直後の花べんには黄色の色素（サフロール・イエロー）の生成量の方が多く、黄色か黄橙色を呈している（図1、3）。細胞内の色素を確かめるには、花べんや花筒部の表皮組織を、先の細いピンセットではぎ取って顕微鏡でのぞいてみることである（図4）。しかし、ベニバナの花べんを摘み取って自然乾燥させただけでは色素の発現は十分ではない。

色素の生成が盛んな頃（開花後二、三日経って肉眼でも紅の色が浮び上ってきた頃）、花べんを摘み取り、酸化、発酵させ色素の発現を助長することが肝心といわれている。

ベニバナの色素としてはカルサミン（Carthamin ; $C_{21}H_{22}O$ ）とサフロール・イエロー（Safflor yellow）の二種類が知られている。このうち赤い色素のカルサミンは、黒田氏によってこう名づけられたが、カルコン類のポリオキシ化合物で水には不溶性なので、アルカリ抽出法で抽出される。カルサミンはパーオキシダーゼ（酵素）の作用でカルサモン（Carthamone ; $C_{21}H_{18}O_{11}$ ）に変化し、紅色を発色する。この色素はアルコールに少しとけ、酢酸マグネシウムでは黄色となり、塩基性酢酸鉛液では赤色の沈澱を生ずる。

ベニバナの花べんなどからカルサミンを抽出すると、その回収率は0・三〜0・五%ぐらいで能率が悪く、その抽出方法については工夫が必要とされている。また、この色素は日光、熱

に不安定で、これについての安定化も課題となっている。

サフロール・イエローは水溶性の色素で、ポリオキシカルコン類やポリオキシフラボノイド類の混合物であろうとされている。黄色の色素として食品添加ができるので需要が多い。

2 紅染めの方法

山形県に昔から伝わっている「紅花餅」づくりは、おそらく中国、韓国から伝授された技法をもとに先祖が考え出した色素発現方法の一つであろう。紅花餅を作るには、花を水洗いしたあと「せいろ」で蒸し、日かげで一晩ねかせて、その間に三回水をかけ、それをすり鉢かうすでついて餅状にする。直径五、六cmの団子にしてむしろにならべ、上にもう一枚むしろをかけた踏み、裏返しながら天日で乾燥させ貯蔵するのである(図13、14)。このほか、摘みとった花を摺り潰し、黄色色素を除いて風乾する「摺り花」(空気酸化法)も行われていた。

実際に紅染めをするには、この紅花餅をほぐして水に浸し、サフロール・イエローを溶出させるため布袋に入れ、数回水をしぼり取る。これを灰汁に浸してカルサミンを浸出させ、この液の中に染める布を入れ、梅酢や米酢につけると紅色に染めることができる。

米沢市の紅花研究所鈴木孝男氏は、「だれにでもできる紅染法」として、次のような染色方法をあげている(35)。

①黄色素(サフロール・イエロー)を分離した後の紅花餅5gを三五〇ccの水に八%のK₂



図13：ベニバナ花摘み風景（上）と紅餅、干花の乾燥風景（下）
（帝国書院・中学校地図・社会科研究'90.12月号「山形のベニバナ」より）



図14：むしろにならべられた紅花餅 (24)



図15：インド婦人のビンディー
(左：指でつけているところ、右：つけ終わったところ)



図16-1：口紅に胭脂を塗った5000年前の神女頭像(中国)



図16-2：古代エジプト（上）、中国唐代（下左）、匈奴（下右）の化粧
（テレビ朝日）

演ずるは、化粧ぎらいで知られる樹木希林さん。匈奴の女性役では、両の頬に大きな赤丸状の紅をつけていた。

CO_3 (炭酸カリウム) を溶解したアルカリ性溶液に二四時間浸漬し、紅色素 (カルサミン) を抽出する。

② 絹布 0・7g を三〇分間紅色素抽出液に浸漬する。

③ 昇温し、一五分後に三五〜四〇℃に達せしむる。

④ 操作しながら、一〇分間毎に三%酢酸を 0・5cc ずつ滴下し、九〇分間で pH 五・〇に達せしめる。

⑤ 三〇分間放冷後、希酢酸液に三〇分間浸漬し、水洗、乾燥する。

二、化粧品としてのベニバナ (紅)

ベニバナは布や紙を染める染料として古代から使われてきたものであるが、一方では口紅や頬紅をつくる化粧料であり、さらにはゴマやナタネのような油脂作物でもあった。

古代エジプトにおいては、赤は復活と永遠を願う色として尊ばれ、鉱物性の赤い色素を魔よけの意味をもこめて化粧にとり入れていたという。

インドのヒンズー教徒には紅を魔よけの呪いとして「ひたい」や「頭髮の分け目」に塗るならわしが特に女性の間で受けつがれている。このような呪いは中国に伝わって、しだいに化粧の認識に変えられたものと見られている (図 15)。

中国では先秦時代から紅（胭脂^{えんじ}）が使われていたという（中国文化のルーツ―郭伯南ほか）が、最近遼寧省西部で発掘された「神女頭像」は、顔に紅彩を塗り、唇には朱を塗り、出土時には鮮紅色を呈していたといわれ、中国女性の口紅や紅による化粧は、少なくとも五千年の歴史があるのではないかと報ぜられている（図16）。

中国での胭脂（紅）の起源には二つの説があり、その一つは「匈奴説^{きょうど}」で、『西河旧事』などの古書に、失我焉支山令我婦女無顔色「燕支山を失ったので、家畜が飼えなくなった。燕支山を失ったので、嫁はやつれてしまった」という歌が載っているという。燕支は燕脂、臙脂、胭脂―ベニバナのことである。もう一つの説は「商の紂王説^{ちゆうわう}」で、この時代の『中華古今注』中の記載として「燕脂は紂の時代に始まり、紅藍花の汁で脂をつくる。燕の国に産したため燕脂と呼ばれた」という文がよりどころになっている（中国文化のルーツ）。

わが国にもよく知られている王昭君（紀元前三三年）が、一九才の時、皇帝の命により匈奴に嫁がされる折、女官の一人が「嫁いでも紅で化粧してはいけません」と言ったのに対し、王昭君は「匈奴に嫁げば、その風習に従わなければならぬ。紅を塗ることを断ることはできぬ」と答えたという話が残っており、当時の女性はベニバナから採った紅で頬紅^{ほお}をしていたものと考えられている（山形新聞、相馬健一氏）。

日本でも紅は唇や頬を染める化粧料であり、民族的な風習として、生れた子供に赤い星をつけたり、宮参りにつれて行く嬰兒の額に紅で犬という字や×印を書いてくれるという例が各地

にあつたという（真壁 仁Ⅱ紅と藍）（24）。

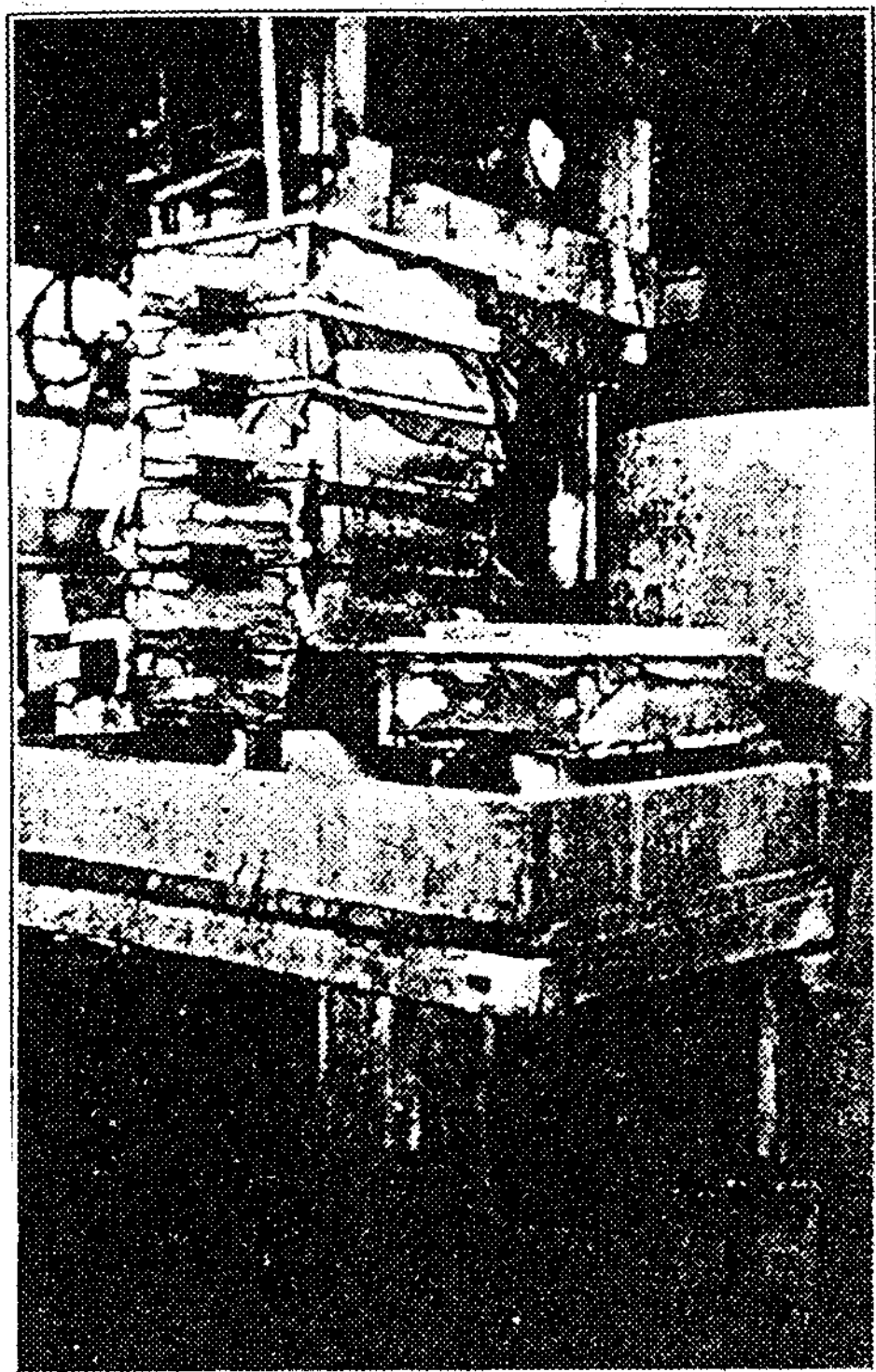
化粧といえは日本では、明治以後、西洋ものの紅の輸入が盛んになつたけれども、元來は、独自の紅の化粧が七世紀の推古朝のころからおこなわれていたという。服飾研究家の遠藤武氏の解説（『日本大百科全書』小学館）によれば、紅は高麗僧曇徴がもたらしたものであつて、そのまた元祖は、朝鮮半島の北部をも領していた紀元前の燕の国（中国）で使つていた紅花の汁からとつた紅であつた。

ベニバナから化粧料の口紅などを作る技術はどのようなものであつたのだろうか。

東京小町紅本舗の羽根田作夫氏（一九二七）が書いた「紅花から口紅になるまで」（12）によると、昭和初期頃の口紅の製法は、およそ次のようなものであつた。

紅餅の一貫目をとり、漬桶に水を満たし、約一昼夜浸しておくとき黄色素が水に溶け出てくる。翌朝これを捨て、紅花を粉碎機にかけて細かくし、糲を適量まぜて圧搾する。この際、灰汁を注ぎながら搾ると、紅色素はアルカリに溶けてくる。この紅液は麻糸を編んで作った「ぞく」というものに含ませ、梅酢（烏梅^{うばい}を水に浸して作ったもの）の媒染によつてよく染まってくる（図17）。これを数回水で洗い、一晩かげぼしして、翌朝これに藁アクをかけ、手で揉んで充分紅色素を遊離させ、水圧器で約六〇〇ポンドの圧搾を行い、濃紅液を得ることができる。

これをビンに取り、梅酢を適量加え、数時間放置し、紅の沈澱するのを待つて上澄液をすて、残液を羽二重を敷いたセイロの中に入れて徐々に水を滴下させ、泥状になるのを待つて、黒色



ベニの濾水用せいろ



染付用に用いる「ぞく」と称するもの、麻を編んで作る。

図17：ベニバナ染めに使われた昔の道具(12)

「ぞく」とは、アサやカラムシを柔らかげ綿状にしたもの。これで紅を吸いとる。

昭和2年発行の植物研究雑誌に載ったこの写真は、もはや姿を消そうとしていた貴重な用具であったという。

漆器の、いわゆる「紅箱」の中におさめるようにする。このようにして作ったのが本紅（片紅ともいわれる）である。


また、山形の紅屋であつた岩淵栄治氏が、昭和二年に書きとめておいたという口紅づくり（紅おろし）の方法も、先に述べた羽根田氏の製法とほとんど同じである。おそらく、京都や東京（江戸）で行われていた紅の作り方が伝授されたものであろう。

一方、中国では晋の時代に書かれた『博物誌』に紅の作り方が掲載されており、「ベニバナを搗いてどろどろにし、黄色い汁を洗い流して、掌大の紅餅を作り、青草を敷いた上に一夜寝かせて陰干しにする。使うときには、それを水に三、四日浸し、黄色い汁は洗い流し、真つ赤な色ができればよい」とあるという（郭伯南『中国文化のルーツ』（16））。

わが国のベニバナ栽培は、中国からの帰化人や裁縫工女が渡来した時（仁徳天皇『三一三年の頃』染料と共にベニバナの種子も持参し、植えられたことに端を発するのではないかといわれている。もし、そうだとすれば、晋代の『博物誌』の中に記載された製法をもとに、わが国のどこかで工夫され改善された紅の製法が江戸時代頃にはすでに完成していたのではないかと想像される。

かつてベニバナの取材旅行でエジプトのアスワンに立寄つた際、街の商店でベニバナの乱花（花べんの干したものを）を見つけ、その利用法を尋ねたところ、「食品に混入する」、「飲料水に入れる」、「昔は手でもんで、女達が頬につけた」という答がかえってきたことを記憶している。

おそらく、めんどろな処理加工をせず、最も簡単に利用するとしたら、エジプト人の教えてくれた三つの方法になるのである。すなわち、ベニバナの化粧料としての利用法の原初は、手もみによる頬紅であったのではなからうか。酸やアルカリで紅を浮き立たせ、濃縮沈澱させて長期保存を考えだしたのは繊細な東洋文明のなせる業ではなかったかと推測される。

なお、山形で生産された紅餅は、地元で紅に精製されるよりは、18のように北前船で京都の紅屋に運ばれ、加工される方が多かった。

※ 退紅あらぞめと深紅こきくれない（韓紅花からくれない）退紅あらぞめとはごく淡い紅花染（聴色ゆるしのいろ）のことで、紅花の濃染（紅赤色）は、韓紅花からくれない（韓からは借字で、からは赤らの略）または「紅の八塩の色」と呼ばれていた。

推古天皇の頃から、冠や衣服の色が地位・身分をあらわす制度が出来、ベニバナをたくさん用いる深紅こきくれないなどは一般に禁制されていた。退染あらぞめは車馬女従の服色、深紅こきくれないは貴族の中に用いる者が多かったという（29）。

